

他力

― 位職便り ―



第十五号（平成二十八年六月）

専徳寺住職 弘中満雄

【歯医者】

テレビ番組「笑点」の新しい司会者Sさんが、昔、こんな話をしていました。

歯の痛みに耐えかね、観念して病院へ行ったSさん。

治療する為のイスに座って「嫌だなあ」と待っていると、隣のお婆ちゃんの診察が始まりました。

先生がたずねます。

「それで、どこが痛いのですか？」

するとお婆ちゃん、「右肩です。」

隣で聞いていたSさん、「そんな馬鹿な。

歯が痛いのですよ！」

しかし歯医者さんは平然と、

「……そうですか。じゃ、口を開けて。」

淡々と治療が始まったそうです。その様子がおかしく、けれども平然とした態度にある種の安心感もおきたそうです。

【病院】

お寺を病院にたとえるとどうなるか。

医者はお釈迦さまです。お経を著されました。お経はある意味、私を診断したお釈迦さまのカルテ（診察記録簿）です。

患者は他ならぬ私、凡夫です。

そして一番大切な薬は、本堂内陣のご本尊、阿弥陀如来です。「南無阿弥陀仏」という、声の仏になられた仏さまです。

お寺の本堂は法話を聞く所です。法話を通して、阿弥陀さまの話、「南無阿弥陀仏」という名号（お名前）のお

いわれを聞きます。これを、「お聴聞」といいます。



【治療】

「病気で、気分が落ち込みます。」

「人間（家族）関係がうまくいきません。」

「大切な人を失いました。」

お寺にはいろんな方が来寺されます。

「別に、どこも悪くありません。」

「付き添いです。」

結構です。どなたもようこそ来寺です。

共に本堂で読経し、共にお聴聞します。

「私は健康です。読経も聴聞も関係ない」という方にも、医師であるお釈迦さまは淡々と治療（説法）されます。私たちの気づかない“歯痛”を知っているからです。

【薬】

お寺が治そうとする病。それは人間苦。

誰もが抱える「人生そのものの苦悩」です。

「生老病死」です。私たちは必ず、若い、

病み、死んでいかねばなりません。

この苦悩、凡夫の私にはピンときません。

先程のお婆ちゃんと同様、忘れがちです。

しかし、私たち全員に共通の大問題です。

阿弥陀さまという薬は、「人生そのものの苦悩」を解決します。お聴聞は、その阿弥陀さまの心に触れる、出遇いの場です。

「きっと大丈夫だ」、「なんとかなる」「自分を信じて」…自問自答が一番の壁です。

【服用後】

今、各々がじつと抱える様々な悩みがあります。阿弥陀さまと出遇った時、新たな一歩が開けます。「阿弥陀さまは何と言われるか」と相談し、「我にまかせよ。必ず救う」の声を聞きながら歩む道です。（終）